

1.

山岳宗教の歴史を秘めた九州の霊峰 英彦山



英彦山と書いて「ひこさん」と読む。

九州北部 福岡県と大分県の県境に聳える高さ 1200 メートルとさほど高くはないが、険しい修験道の山。

北岳・中岳・南岳の3つの峯を持ち、急峻な峯の周囲には原生林が広がる。中岳の頂上に英彦山神宮の社殿があり、北麓の添田町の登り口には大きな銅鳥居があり、ここから延々と中岳社殿まで参道が続いている。

また、東側の北岳から中岳・南岳を経て鬼杉に下り、ベースの銅鳥居のところに戻る縦走路が整備されている。英彦山の名前と歴史にあこがれ、是非とも登りたい山のひとつでした。



英彦山中岳頂上 英彦山神宮上宮

6月19日 朝早く山口美祢の家をでて、家内と二人登ってきました。

「高さ1200メートルでたいしたことなし」と思っていたのですが、そこは修験の山 登山口の英彦山神社の銅の鳥居から一気に頂上まで標高差700メートルを階段状ではぼまっすぐ延々と続く直登り、下りは南岳から一気に鎖場が続く急峻路。一気に700メートルの登り下り ヒザが弱い中年には堪えました。

でも さすが霊場 素晴らしい巨大木の杉・ぶな林 あんな大きくて高い杉見たのは記憶になし。

また、南岳の上からは南に展開する九州の主だった山々を見ることが出来て満足でした。



原生林



鎖場が続く南岳からの下り



巨大な鬼杉

英彦山の縦走路で 2005.6.19.

「修験道」とは ものの本によると「厳しい自然の中で心身を鍛練して 超自然的な「験」の能力で人間の悩みを解決する」といい、素朴な山岳信仰に陰陽道 仏教 神道がくわり、日本独特の宗教になった。

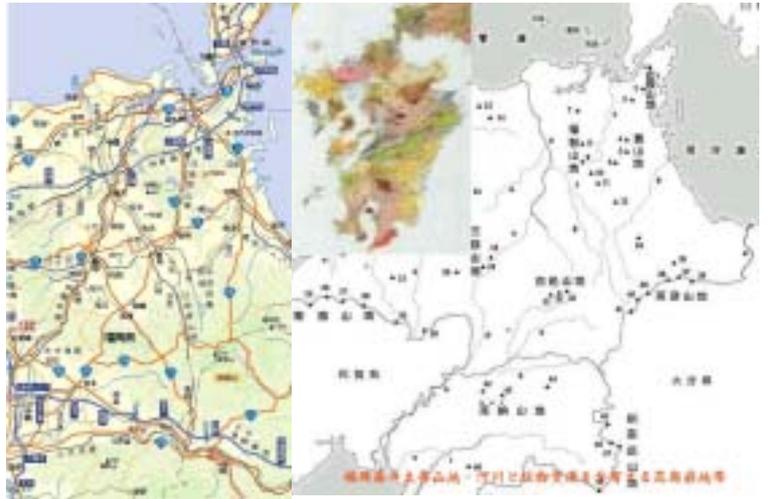
修験道の山は日本各地にあるが、英彦山は「出羽の羽黒山」「大和の大峰山」と合わせ、「三大修験道の山」と称される。また、「彦」の名を持つ霊山のうち、越後の弥彦山 播磨の雪彦山とともに「三彦山」とも呼ばれる。

これらの山は古代にすでに開山された歴史を持ち、修験の人たちが古来 鉱物探査などの役割を担ったともいわれ、修験の山の近傍からは鉱物資源が採取された歴史を持つ。

この英彦山を盟主とする福岡県と大分県の県境を東西に広がる山群は多くの鉱物資源を埋蔵する日本有数の花崗岩地帯であり、弥彦山

の北側の登り口 添田町には今も「採銅所」の地名が残り、また、3世紀日本最古の金属工房(庄原遺跡)も出土している。これらの山群から流れ下る川の流域は弥生・古墳時代 朝鮮半島と一体となった日本文化の先進地であり、「鉄」についてもこの地のどこかで、いち早く製鉄が試みられたのではないかと考えている。そんなこともあって、是非とも登ってみたい山の一つであった。

山口を朝早く出発して 関門海峡を渡って 小倉南 IC をでて、田川・香春へ向かって、九州のカルスト台地 平尾台を眺めながら南下。山間を抜け街中に大きなセメント工場が見えてくると香春町。さらに南下するとまもなく遠賀川の上流彦山川の土手にでるともう英彦山の麓添田町。左手に田川市からの日田彦山線も酔ってきて、山間に入って行くと程なく JR 彦山駅。ここから左に折れて道路標識に従って、山を登って行くとほどなく、英彦山の神宮下。大きな銅鳥居の前に出る。関門海峡を渡って約2時間弱のドライブである。



福岡県の主要山地・河川に鉱物資源を含む九州の花崗岩地帯を重ねて

【参考 和鉄の道】

3. 鉄の6世紀 北九州の装飾古墳に和鉄の道を重ねて

<http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/sosyoku00.htm>

1. 英彦山神宮 銅鳥居登山口から参道を中岳頂上へ



今日はガイドブックお勧めの銅鳥居のところから、英彦山神宮の参道をまっすぐ中岳へ直登して南岳から鬼杉へ下るコースをたどる約8Kmのコース。

この英彦山の参道登山路は古代から延々と続く英彦山詣の参道で、高低差約700メートルを長い階段状の参道と階段状の山道が頂上まで延々と続く。

下りは中岳から南岳にでて、そこから一気に鎖場の続く山道を400メートル下って巨大杉のある鬼杉へ下る。変化に富んだこれぞ修験の山と感じるお勧めのコースという。

10時少し前 銅鳥居の前から 登りだす。見上げる銅鳥居は重要文化財。

「英彦山」の金文字が輝いて、この山の周辺が銅の産地であったことを示している。

そういえば 吉野山金峯山寺にも銅の大鳥居があった。
鳥居から英彦山神宮の下宮・奉幣殿まで、約 1Km 山に向かって、まっすぐに石畳の参道が登っている。
参詣道の両側は緑に包まれ、ちょうどアジサイが咲いて美しい。春には桜が参道を彩るという。
「神宮下」の大きな鳥居からは参道は石段にかわり、一層傾斜がきつくなる。両側には次々と宿坊跡があり、杉木立に次第に変わる。日曜日の朝であるが、ほとんど人影なく静かな参道に日が差して一層緑が美しい。



歩幅と石段があわないので、だんだんきつくなっていやになってくるが、石段は延々と上へ続き、30 分程で赤い奉幣殿の社殿が見える。今年の台風と地震の被害の修復作業中で、社殿には行けない。社殿の直ぐ上の崖が崩れていた。



英彦山神宮 奉幣殿へと延々続く参道 2005.6.19.



振り返ると登り口ははるか下。高度差約 200 メートル一気の参詣道。往時は宿坊が立ち並び、多くの人が行き交ったのだろう。

ここが英彦山神宮の下宮であるが、緑の杉木立に囲まれ、英彦山の山頂は見えない。

ここで、やっと石畳の階段道が終わるが、急な上り坂の山道が杉木立に包まれた尾根筋をほぼまっすぐ頂上に続いている。

やつと山道になって 階段から開放されると思いましたが、やっぱり道は急な階段状の山道が素晴らしい杉木立の中を登って行く。

神域で昔から保護されてきたのであろう本当に背の高い杉の巨木があちこちに立ち並び、視界は開けないが、素晴らしい緑の中の山道で疲れを感じない。





英彦山 中岳上宮へ続く階段状の参道と次々現われる杉の大木 2005.6.19.

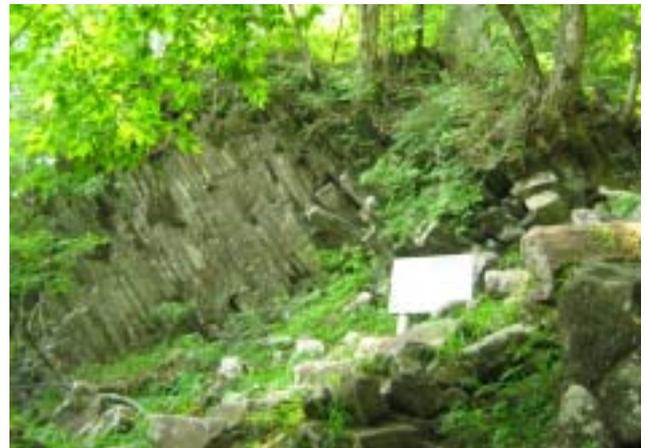
参道脇のあちこちで杉の巨木が折れたり、倒れ掛かっているのが目に付く。昨年の台風のすさまじさか。。。。でも、折れてコケがついているのもある。

時折、ベンガラ色に染まった登山道が現われる。おそらく 鉄分の多い場所でしょうが、三輪山のように砂鉄がないか 目を凝らすのですが、砂鉄はなし。

また これだけ良く整備された延々と続く階段状の参道。何百年に渡って整備されたのでしょうか、何処からこの大量のしかも形の整った石を運んだのか・・・と。この疑問は南岳からの下りで随所で見た「材木石」と呼ばれる「柱状節理」の岩の露頭ですぐ溶けました。この英彦山は昔 マグマが噴出しゆっくり固まった溶岩台地 柱状節理の岩の山。形が整った石は山のいたるところにあり、急峻な岩山 そして豊富な鉱物資源が埋もれる山であるのもこれがルーツか。そういえば 参道脇の岩も小ぶりの形の整った岩が多い。



ベンガラ色した土がみえる参道 2005.6.19.



南岳から鬼杉への下りで見た安山岩柱状節理の岩の露頭「材木岩」 2005.6.19.

奉幣殿から約1時間ほどで、杉木立の中を抜け、稜線部にでると空の見える傾斜のゆるい道となり、ほっとする。中岳への参詣道の間中点 中津宮。 英彦山の頂上部や風倒木の多い原生林を楽しみながら進むと「下乗」の碑。



昔 ここで入山の銭を取った関所跡
 でここから先はみんな歩いたという。
 ここからまた階段が続く登りとなり、
 水場と産霊神社が祭られている広場
 をすぎるとまもなく突然に上宮社殿
 の前が出る。 社殿のみが乗る小さ
 な頂 中岳頂上である。



原生林越しに中岳の稜線が見える 2005.6.19.



中岳頂上周辺

昨年の台風・地震の影響が 社殿の石組など損傷が激しい。頂は神域 社殿
 が乗るのみで空は開けているが、展望が利かない。
 社殿の裏 直ぐ東側に下りた小さな広場に中岳山頂のモニュメントがあり、
 数組のグループが昼食を取っている。ここも木々に邪魔され、余り展望が利
 かない。簡単に握り飯をほうばって南岳へ
 上宮の社殿から吊尾根を一端鞍部に下って ちょっと登り返すと南岳頂上。
 スタートから2時間半ほど 英彦山の最高峰 1200メートルで展望台があり、
 九州一円の山々が広がる大パノラマがみられる。



中岳 頂上



中 岳



中岳と南岳の鞍部



南 岳

2.南岳 頂上からの展望と鬼杉へ

鶴見 由布岳

久住山
岳滅鬼山

阿蘇山



南岳 展望台から 九州の山々の展望 2005.6.19.

英彦山の東南面を中心に 日向灘から日田盆地とその背後の九州脊梁の山々 がかすんでいる。

鶴見 由布岳 久住 阿蘇山など 展望台の展望表示と見比べて 山の特定を楽しむが、自信なし。

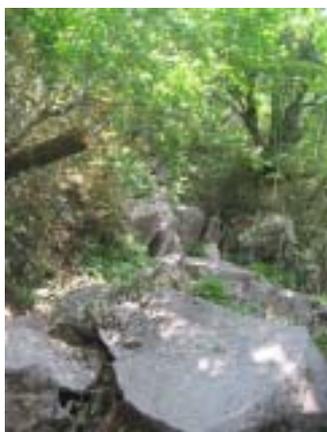
また、手前左にはきれいな三角形をした山がみえるが、苅又山か。。

良く整備された参詣道を登ってきたので、急坂 階段状の山道を登ってきたので、修験道の厳しい山を登ってきたとの印象は薄いですが、展望台に登って周囲を見渡すと、頂上や稜線の狭さなど、山の急峻さがわかる。

九州の山の展望を楽しんだ後、鬼杉に向かっていよいよ下山にかかる南岳の頂上からの下りもいきなり鎖場。地図ではたいした下りにみえないのですが、山道というより、崖の岩の間を下っている感じである。

南岳の頂上から 400 メートルを一気に降りる。

一気に修験の山を実感する。鎖としっかりした道がついているので、心配はないが、あちこちの岩や鎖を持ちながらの下降で、緊張する。



南岳から鬼杉へ 急峻な下り・鎖場で

2005.6.19



英彦山の南岳周辺の岩峯が林立する谷と鬼杉への下り縦走路

南岳からの急峻な崖の下降の向こうには深い谷が広がり、所々に急峻な岩峯が見え隠れして素晴らしい。参詣道とは異なる修験道の山の形相である。

急な下降をしながら道はまた深い森の中に入り込み、30分ほどで安山岩柱状節理の露出した「材木岩」の横を下る。



安山岩の柱状節理がろしゅつした「材木岩」

いったん斜面に出ると右へ英彦山の中腹を巻きながら奉幣殿へ戻ってゆく道と鬼杉へさらに下る道の分岐。鬼杉への道を選択して、さらに急峻な下降道を進む。



奉幣殿への分岐周辺



大南神社

崖の岩やの中にある大南神社の横を下るとほどなく巨大な天をつく杉が立つ山の斜面に囲まれた窪地に出る。もう杉の大きさに唖然とする。南岳の頂上から約1時間ほどで天然記念物鬼杉。

3. 天然記念物 「鬼杉」



天然記念物「鬼杉」 樹齢 1200年 樹高 38m 幹周り 12.4m 根まわり 14m
途中で折れるまでは高さ 70m だったという



鬼杉
この杉は、県下で最も大きな巨木です。木の周囲は、12.4M、高さは上半分が倒れた現在の状態で38Mあり、樹齢はおおよそ1,200年と推定され、今では国の天然記念物に指定された古い英彦山の、生きた記録の一つです。
福岡県

太さにもびっくりするが、見上げる高さにはただただ唖然とするのみ。何とか全体を写真に収めようとするが無理。

「昔 鬼がこの山を退散する時に、
持っていた杖を土に突き刺し、それが芽をだしたもの」との伝説がある。

ほかにも背の高い杉の巨木がこの英彦山には林立しているが、圧倒的に大きい。幹の太い巨樹は多いが、こんなに高い巨樹を意識したのはこの英彦山が初めて。これだけ大きければ、縄文の森も納得できる。

4. 鬼杉から巨大な杉林の中を玉屋神社を通して奉幣殿へ

この鬼杉のところからさらに下へ林道を通して JR 彦山へ行く道があるが、西の尾根に取り付いて、小さな尾根筋を越えて英彦山の山腹をまきながら奉幣殿に戻る道を選択。

今までの急峻な下りから、多少の上り下りの尾根越えはあるものの素晴らしい杉林の中の緩やかな山道を歩く。



鬼杉から奉幣殿へ



玉屋神社と周辺の素晴らしい杉林

視界の開けぬ杉林の中を一つ尾根を越え、また尾根を越えて戻ってくる。30分程で素晴らしい杉の巨樹群がある玉屋神社の平坦部に出る。山に囲まれ、静寂に包まれた谷間に背の高いまっすぐな杉が林立し、素晴らしい場所である。ここから再度 尾根筋を登って、尾根を乗り越え、英彦山の稜線の山腹を巻きながら延々と続く。平坦ではあるが、結構上り下りがある、長い道にもう閉口する。英彦山の稜線が見えてくると奉幣殿も近い。急峻な上り下りでは緊張していてもさほど気にならなかった膝が緩やかな山道になって堪えてくる。



英彦山の稜線 玉屋神社と奉幣殿の間で

鬼杉から1時間30分程で赤い奉幣殿の社殿が見え、奉幣殿の横で中岳への参道と合流する。これで、終わりだといいいのですが、ここからまた、延々と続く下り階段の参道道。もう 膝が動かない。奉幣殿参拝の数組の観光客が同じように下っめているが、みんな立ち止まったり、ふうふう言っている。小さな子供が「もう 歩けない」と泣いている。こっちも同じである。みんな 石鳥居のある神宮下の駐車場の方に曲がってゆくのが恨めしい。膝がぐがぐの中 やっと銅の鳥居のところに来て、一日の登山が終わった。

5. 英彦山で見かけた初夏の山の草花



初夏 山道に赤い花を敷き詰める「ベニドウダン」



白いドウダン



???????



フタリシズカ

6. 一度の彫りたかった修験の山 英彦山に登って

低山でたいしたことないと思っていましたが、高低差 700m の急峻な上り下り さすが修験の山。緑の原生林の森に勇に高さ 30 メートルをも超えてまっすぐ林立する杉の巨樹の群れ、中でも巨樹「鬼杉」にもビックリ。

縄文の巨樹が作った「森の文化」に使われた巨大木 「本当にそんな高い巨樹があるのか・・・」と疑っていましたが、「鬼杉」をはじめ、この英彦山の原生林に林立する巨樹群を見て納得です。修験の山であるがゆえに守られてきた森 今後も開発の手が伸びずに守られることを願う。

また、修験の山と鉱物資源 きっても切れない関係に「鉄のルーツ」の夢を重ねて歩きましたが、思いもかけずさまざまな自然にあえて、一層の夢を書き立てられています。

急峻な岩峯に見る溶岩台地の痕跡とこの山に「鬼」がいた「鬼杉」の存在。

マグマが造った柱状節理の露頭が見せる「材木岩」

その岩を敷きつめて延々と中岳へ続く階段道の参道

登山道のあちこちに見るベンガラ色の土。

さらには麓にある青銅の銅鳥居と「採銅所」の地名等々。

そんなことを考えながら、遠賀川の上流 彦山川沿いを添田の街へ
長い修験の歴史が随所にみられた静かな山歩きにきつかったですが、満足の日でした。